

## 唐代「輕薄」考

### はじめに

唐代、多くの詩人たちが「輕薄」と評價されていた。例えば、唐の開成年間に「詩學士」を新設しようとした文宗に對し、時の宰相李瑋は、次のように苦言を呈している。

當今起置詩學士、名稍不嘉。況詩人多窮薄之士、昧於識理。：中略：臣聞憲宗爲詩、格合前古。當時輕薄之徒、摘章繪句、聳牙崛起、譏諷時事。爾後鼓煽名聲、謂之元和體、實非聖意好尚如此。今陛下更置詩學士、臣深慮輕薄小人、競爲嘲詠之詞、屬意於雲山草木、亦不謂之開成體乎。（當今起して詩學士を置くは、名稍嘉からず。況や詩人は多く窮薄の士、識理に昧きをや。：中略：臣聞くならく憲宗の詩を爲るは、格前古に合ふ。當時輕薄の徒、章を摘しき句を繪えがくに、聳牙崛起、時事を譏諷す。爾後名聲を鼓煽され、之を元和體と謂ふは、實に聖意好尚の此くの如きには非ずと。今陛下更に詩學士を置くは、臣深く慮るに輕薄小人、競ひて嘲詠の詞を爲り、意を雲山草木に屬し、亦之を開成體と謂はざるかと。）

李瑋の詩人たちに對する評價は、低い。彼は、詩人の多くが窮迫の士であり、道理にも通じぬ者である、と決めつける。そして、新奇な表現を競い、時の政治を「譏諷」し、自らの名をあげようとする詩人たちを、憲宗朝の詩壇を實例に舉げて非難する。ここでいう「摘章繪句、聳牙崛起」とは、ことさらに詩句の雕琢に意を注ぎ、見慣れぬ難しい語を用いてひときわ目を引く表現をする、ほどの意味である。ここでは、詩人の獨創性追求の様々な努力が、自己宣傳を目的とした奇を衒う行爲であると一刀兩斷される。そして元和年間の詩人が時政を批判して名をあげたように、文宗が「詩學士」を置けば、「輕薄小人」が競って他者を嘲る詩歌を作りだすようになる、と詩作の能力を重視する人材登用の弊害を説いている。

さて、ここで李瑋が批判する「輕薄小人」としての詩人たちは、「輕薄行」や「公子行」などの詩賦に登場する「輕薄」な若者とは一線を畫する性質を有している。

すでに、小川陽一氏は「輕薄」考 明代白話小説と善書の中で明代の善書において使用された「輕薄」の語が「輕佻浮薄とか、あるいは敦厚・慎重・謙虛などの反意語としての一般的な意味に止らない

極めて重大な悪徳という特殊な意味をもって「指摘している。」

「輕薄」という人物評語の指し示す人物像や意味が、時代とともに變化するのならば、唐代、少なからぬ詩人の人物像を表現するために用いられた「輕薄」という言葉には、どのような評價が込められていたであろうか。本稿の目的とするところは、唐代における人物評語「輕薄」が指し示す人間像を具體的に把握することにある。

## 一の一 「輕薄」の原義

そもそも「輕」と「薄」は両方ともに評語として古くから使用されてきた。評語「輕」の比較的早い用例は、『春秋左氏傳』「僖公 三十三年」に見られる。そこには周の北門を通過する秦軍を觀望した王孫滿の言葉が、以下のように記される。

觀之、言於王曰、秦師輕而無禮。必敗。輕則寡謀、無禮則脫。入險而脫、又弗能謀、能無敗乎。(之を觀て、王に言ひて曰く、秦師輕くして禮無し。必ず敗れん。輕ければ則ち謀ること寡く、禮無ければ則ち脫す。險に入りて脫し、又謀ること能はざれば、能く敗ること無からんかと。)

この場合「輕」とは、地に足のつかぬ、ほどの意味で、「脫」とは、なおざりにする、の意である。秦の穆公は、鄭伯(捷)と覇者であった晉侯(文公・重耳)とが前年に相次いで死んだことをうけ、鄭を急襲せんとして兵を出した。周を通過するその軍容を見た王孫滿は、「軍は落ち着きを失っていれば謀略を持たず、禮を缺けば規律がゆるむ。これでは危険と背中合わせの戦場で、勝てるはずがない」と看破したのである。

一方「薄」もまた、『孟子』「萬章篇」に「聞柳下惠之風者、鄙夫寬、

薄夫敦。(柳下惠の風を聞く者は、鄙夫も寛く、薄夫も敦くならん)」とあるように、徳の薄い・酷薄な、の意を表してきた。

これに對して、「輕」と「薄」とが同時に使用される場合の最も早い例は、『禮記』に確認できる。同書「祭統」では、以下のように兩字が用いられている。

夫義者、所以濟志也、諸徳之發也。是故其徳盛者其志厚、其志厚者其義章、其義章者其祭也敬。祭敬、則竟内之子孫莫敢不敬矣。是故君子之祭也、必身親泣之。有故則使人可也。雖使人也、君不失其義者、君明其義故也。其徳薄者其志輕、疑於其義而求祭使之必敬也、弗可得已。祭而不敬、何以爲民父母矣。(夫れ義は、志を濟す所以なり、諸徳の發なり。是の故に其の徳盛なる者は其の志厚く、其の志厚き者は其の義章かにして、其の義章かなる者は其の祭るや敬す。祭るに敬すれば、則ち竟内の子孫敢て敬せざる莫し。是の故に君子の祭や、必ず身ら親しく之に泣む。故有れば則ち人にせしめて可なり。人にせしむと雖も、君其の義を失はざるは、君其の義を明らかにする故なり。其の徳薄き者は其の志輕し、其の義を疑ひて祭に之をして必ず敬せしめんことを求むるも、得べからざるのみ。祭りて敬せざれば、何を以て民の父母と爲らんや。)

ここでは、徳目「義」の實現という觀點から、祭祀のあるべき姿が説明されている。君子が執り行ふ祭祀は、君子たる徳の立派さと志の厚さゆえに、本義が明かとなり、敬虔さが守られることとなる。一方、徳の薄い者は志が輕く、祭祀の本義を理解せずにこれを實施するため、恭敬さを維持することができない。祖靈を祭って恭敬ならざる者が人君として立つことはできない、というのである。

ここに見られる「輕」と「薄」は、君子の徳が「盛」「厚」であることに對する反意語として使用されている。「輕薄」とは本來的に、小人、つまり君子に非ざる者を示す評語であつた。君子として保持すべき人徳の缺落を指して、「輕薄」といふのである。

### 一の二 「輕薄少年」と「輕薄公子」

評語「輕薄」の、君子に非ざる者の薄徳を明示する、という性格は、後世に引き繼がれ、輕佻浮薄な行爲や人柄を指し示す一般的な評語として使用されてきた。

また一方で評語「輕薄」は、時代ごとに特定の階層の中に現れる、特徴的な小人の集團に對して、集中的に使用されることも行われた。その好個の例が、後漢から三國期に徒黨を組んで大暴れを繰り返し、「輕薄少年」と呼ばれた一群の無法者たちである。

この「輕薄少年」たちの特徴を端的に説明する記述が、以下にあげる『後漢書』卷二十四「馬援傳」に見られる。

杜季良豪俠好義、憂人之憂、樂人之樂、清濁無所失、父喪致客、數郡畢至。吾愛之重之、不願汝曹效也。…中略…效季良不得、陷爲天下輕薄子。所謂畫虎不成、反類狗者也。(杜季良は豪俠好義、人の憂ひを憂ひ、人の樂しみを樂しむ、清濁失する所無く、父の喪に客を致すに、數郡畢く至る。吾之を愛し之を重んずるも、汝曹の效ふを願はざるなり。…中略…季良を效ひて得ずんば、陥りて天下の輕薄子と爲る。所謂虎を畫きて成らず、反つて狗に類する者なり。)

この文章は、後漢の初頭、南方の異民族との戦いで多大な業績を上げた伏波將軍馬援が、都にいる二人の甥の言動を心配し、その妄動を

戒めた手紙の一部である。文中「豪俠好義」と描かれる杜季良とは、諱は保、京兆の人で越騎司馬・秩千石を與えられていたが、後に怨仇から訴えられ官を免ぜられている。馬援は、任侠とも評すべき杜季良の眞似をする危うさを「季良を眞似て、なり損ねれば、『天下の輕薄者』となつてしまふ。それは世間でいうところの『虎を描こうとして失敗し、かえて犬のようになってしまふ』にあたる」と指摘している。ここでいう「天下の輕薄者」とは、世間の人々から「輕んじ」「薄んぜられる」小人、のことである。「豪俠好義」を氣取つてなり損ねた人間、つまりは「任侠くずれ」とでも表現すべき者が「輕薄者」となるのである。

確かに、このような「輕薄少年」たちは、世を騒がせる小人として忌み嫌われ、輕んぜられる存在であろう。しかし同時に、平然と命のやりとりを行う彼らは、亂世の中で侮りがたい戦力として恐れられ、重寶がられたことも事實である。

例えば、『三國志』卷五十五「吳志」の「甘寧傳」には、

甘寧字興霸、巴郡臨江人也。少有氣力好遊俠、招合輕薄少年、爲之渠帥、群聚相隨。挾持弓弩、負毘帶鈴、民間鈴聲、卽知是寧。(甘寧字は興霸、巴郡臨江の人なり。少くして氣力有りて遊俠を好み、輕薄少年を招合し、之が渠帥と爲るに、群聚相隨ふ。弓弩を挾持し、毘を負ひて鈴を帶せば、民間鈴聲を聞くに、卽ち是れ寧なるを知る。)

とある。いつも武器を携行し、頭に羽をさして腰には鈴を帯びるといふ、派手で物騒な甘寧が、「輕薄少年」を糾合して人々を震え上らせた様子が生き生きと描寫されている。さらに同書は彼の姿を「寧雖蠻猛好殺、然開爽有計略、輕財敬士、能厚養健兒。健兒亦樂爲用命。

(寧麤猛にして殺を好むと雖も、然れども開爽にして計略有り、財を輕んじ士を敬ひ、能く健兒を厚養す。健兒も亦樂しみて用命を爲す。)と記している。荒々しい性格で好んで人を殺した甘寧は、同時に部下の面倒をよく見る人物でもあった。彼の配下となり、喜々として彼の命に従っていたという「健兒」とは、つまり「輕薄少年」たちのことである。俠をもって任じていた甘寧が、彼に憧れて眞似をする「輕薄少年」たちを集めて統領となり、徒黨を組んで天下に横行したのである。

世の中から輕んぜられるが、同時に世を動かす勢力の一つとして恐れられる存在、それが後漢から三國期にかけての「輕薄少年」たちであった。

一方、文學作品には、史書の記述と性格を違える「輕薄」な人々が登場する。その姿が、張華「輕薄篇」(『樂府詩集』卷六十七)には「末世多輕薄、驕或好浮華。志意能放逸、貨財亦豐奢。被服極纖麗、肴膳盡柔嘉。(末世輕薄多く、驕或にして浮華を好む。志意能く放逸、貨財も亦豐奢。被服纖麗を極め、肴膳柔嘉を盡くす。)」と記されている。

ここに見られる「輕薄」は、甘寧が集めた「健兒」たちのそれとは異質である。後漢から三國期にかけての「輕薄」が任侠くずれの血氣盛んな不良少年であったのに對し、六朝期のそれは豊かな財産に任せて歡樂の限りを盡くす放蕩公子の姿に象徴される。この傍若無人な放蕩を繰り返す貴族子弟に對して、張華は非難の意を込めて「輕薄」の表現を用いている。六朝期から初唐に全盛を極める貴族制は、任侠くずれとはまた別の「輕薄公子」と呼ばれる若者たちを生み出したのである。

本節で確認した任侠を氣取って男伊達を競う若者の姿や、地位・權力を笠に着て歡樂に耽る公子たちの放蕩ぶりや、禮教的に非難されるべき性質のものである。しかし同時に、それらは横溢する生命力をも併せ持つ。そのために「輕薄少年」と「輕薄公子」は、そのイメージを一體化させ、文學作品のモチーフとして後世長く繼承された。樂府題「少年行」「公子行」などで繰り返し詠われた男氣を競う輕裘肥馬の伊達な若者の姿は、こうして「輕薄」の典型の一つとなり、詩語として意味を固定化させる。唐代文學で使用されている「輕薄」という詩語が、唐代詩人たちに對して用いられる評語「輕薄」と大きく異なる人物像を表現している理由はここにある。

さて、「輕薄」とは本章で確認したように、そもそも君子として社稷を保ち得ない、徳が薄く志が軽い小人の稱であった。この君子に非ざる者という人間像が、後漢から三國時代には任侠くずれの不良少年を指すようになり、また六朝では財力に任せて歡樂に耽る放蕩公子に適用されたのである。もともと社會を維持する立場の者の薄徳を批判するために使用されていた「輕薄」が、社會底邊で暴れ回る者にまで、適用範圍が擴大した。しかし見方を變えれば、薄徳の君主も命知らずの不良少年も傍若無人な放蕩貴族も、同時代に生きた人々にとつては、平穩な日常を脅かす、社會秩序の破壊者もしくは社會規範からの逸脱者であるという點で共通する。ここから考えれば、ある特定の社會階層に屬する人々を評價する「輕薄」の語は、その人々が社會全體の中でひととき目を引く存在であり、彼らの言動が他者の安寧な生活や社會的な立場、また社會の秩序などを損なうと見なされた場合に用いられる表現であった、といえる。

## 二の一 烙印としての評語「輕薄」

前章で確認した「輕薄少年」や「輕薄公子」の生命力あふれる人物像に對して、唐代に入ってから「輕薄」な者には、陰濕な無禮さが目立つようになる。そしてまたこの評語には、そのような人物に對する強い侮蔑の念が込められるようになる。このことがわかる資料として『舊唐書』卷一百九十九「文苑列傳」に載せる員半千の記事がある。

(員半千) 長安中、五遷正諫大夫、兼右控鶴内供奉。半千以控鶴之職、古無其事、又授斯任者率多輕薄、非朝廷進德之選、上疏請罷之。由是忤旨、左遷水部郎中、預修三教珠英。(長安中、五たび遷りて正諫大夫となり、右控鶴内供奉を兼ね。半千控鶴の職、古其の事無く、又斯の任を授けらるる者率ね輕薄なるもの多く、朝廷進德の選に非ざるを以て、上疏して之を罷めんことを請ふ。是に由り旨に忤き、水部郎中に左遷さるるも、三教珠英を修するに預る。)

員半千は、高宗・則天武后・中宗・睿宗朝に活躍し、當時「五百年に一人の賢者(半千)」と稱揚される第一級の教養人であった。武后は、宣慰吐蕃使の任に就こうとしていた彼を、手元に留め置き、供奉として弘文館直學士に任命した。この記事は、その員半千が長安年間「右控鶴内供奉」からの退任を求めた模様を説明している。

この「右控鶴内供奉」とは、則天武后聖曆一(六九九)年に新設された「控鶴府」に屬する官職名である。その初代の長は、武后の寵臣張易之であった。

ここで員半千は、「この職は任命された者の多くが『輕薄』であり、朝廷が德行ある者を選任する職ではない」と理由を述べ、自らの退任

を求めている。任命された役職の非をことさらに指摘し、先任者たちを「輕薄」であると斷じて退任を求めるといふ彼の言動は、正諫大夫としての責務を果たそうとしたゆえのものであろう。彼をしてこま言わしめた「控鶴府」とはどのような組織であったのか。ここに集まる人々と武后の様子が、『新唐書』卷一百四「張易之傳」には以下のように記されている。

聖曆二年、始置控鶴府、拜易之爲監。久之、更號奉宸府、以易之爲令。乃引知名士閻朝隱・薛稷・員半千爲供奉。后每燕集、則二張諸武雜侍、擣博爭道爲笑樂。或嘲詆公卿、淫蠱顯行、無復羞畏。時無檢輕薄者、又諂言昌宗乃王子晉後身。后使被羽裳吹簫乘寓鶴裴回庭中、如仙去狀。詞臣爭爲賦詩、以媚后。(聖曆二年、始めて控鶴府を置き、易之に拜けて監と爲す。之を久しうして、號を奉宸府と更め、易之を以て令と爲す。乃ち知名の士の閻朝隱・薛稷・員半千を引きて供奉と爲す。后燕集する毎に、則ち二張諸武雜侍し、擣博爭道して笑樂を爲す。或いは公卿を嘲詆し、淫蠱すること顯に行はれ、復た羞畏無し。時に輕薄を檢する者無く、又昌宗は乃ち王子晉の後身なりと諂言す。后羽裳を被らせ簫を吹かせ寓鶴に乗せ庭中を裴回せしめ、仙去の狀の如くす。詞臣争ひて爲に詩を賦し、以て后に媚ぶ。)

引用文中の「淫蠱顯行」とは心や行いを惑亂させる事柄が公然と繰り上げられる様子をいう。このような表現を用いて描かれる武后の取り巻きたちは、その權勢を背景に、賭け事に熱中して大騒ぎを繰り返している。その行爲自體は、六朝の「輕薄公子」と大差ない。しかし六朝期のそれと異質な點は、他の朝臣を愚弄して恥じることがない様子とあからさまな阿諛追従ぶりである。馬鹿騒ぎを繰り返すのみなら

ず、偉ぶって他者を嘲罵し続ける者たちの愚行は、冷静にその場を觀察する者の目に、眉をひそめる浮ついた行爲と映るであらう。さらにまた、これを叱責することもなく、寵臣の張昌宗を高山の仙人「王子晉（喬）」に見立てて遊び興ずる武后と彼女に阿諛追従する詩人たちの姿を、『新唐書』は事細かく描き出している。このような下劣な喧噪の中から、員半千は抜け出そうとしたのである。退任を求めた結果が左遷で済んだのは、學識の深さと學名の高さとが彼を守ったのであろうか。左遷後も彼は、武后朝の文化事業である『三教珠英』の編集に携わり続けている。この記述に見られる武后とそれを取り巻く人々の姿が、事實か否かを明らかにすることは、本稿の求めるところではない。今ここで着目したいことは、員半千に代表されるような當時の教養人にとって、武后に拔擢された新興官僚たちは、侮蔑すべき存在であったという事實である。

さて、このような新興官僚・知識人たちに對する「輕薄」の語を用いた酷評は、他にも多く確認できる。例えば『舊唐書』卷一百三十三「李泌」には、德宗朝の宰相であった李泌が拔擢した人々について、「（李泌）復引願況輩輕薄之流、動爲朝士戲侮、頗貽譏誚。（李泌）復た願況の輩の輕薄の流を引き、動もすれば朝士の戲侮するところと爲り、頗る譏誚を貽す。」と記されている。大曆・貞元年間に獨創的な詩風で名をあげた願況は、時政を痛烈に批判する諷諭詩を多く残した。しかし彼のごとき新興知識人たちが拔擢した李泌は、そのことで朝臣たちの侮りを受け、責め譏られることとなった。また『新唐書』卷一百五十一「關播」は、同じく德宗朝の宰相であった關播が目をかけた人々について「時李元平・陶公達・張翥・劉承誠率輕薄子、游播門下、能侈言誕計、以功名自喜。播謂皆將相材、數請帝用之。（時に

李元平・陶公達・張翥・劉承誠は率ね輕薄子、播の門下に遊び、侈言誕計を能くし、功名を以て自ら喜ぶ。播は皆將相の材ありと謂ひ、數帝に之を用ゐんことを請ふ。」と記している。こちらでも、宰相關播が李元平たちの才能を認めて彼らの任用を求めのだが、彼らの才能は「大言壯語とでたらめなばかりごと」と見なされ、その人柄に對しては「輕薄子」という評價が下される。

このように、唐代に入ってから「輕薄」には、單に相手が君子に非ざる者であるという評價を示すばかりではなく、その人物の人格の下劣さを非難する役目が積極的に付與されることとなる。

もちろん、第一章で確認した張華「輕薄篇」における「輕薄公子」に對する使用例のように、本來「輕薄」という言葉には、その評を與えられた人物への非難の意が込められる。しかし放蕩を繰り返す貴族子弟や血氣盛んな若者たちに冠されていた「輕薄」という評語は、小人を意味しながらも同時に、開放的な行動性や横溢する生命力を併せ持つために、輕裘肥馬の伊達な若者が持つ奔放不羈さや俠氣盛んな勇み肌の若者などをイメージさせる詩語になって一般化した。

一方、唐代の詩人たちに對して用いられた人物評語としての「輕薄」は、相手の人格を否定する非難の強さを弱めることがないまま、使用され続けることとなる。その具體的な様子を、章をあらためて確認して行きたい。

## 二の二 他者を見下す「輕薄」

前節で確認した武后を取り巻く「輕薄」な人々への批判には、上位者に對する不遜な言動が取り上げられていた。この點について、もう少し詳しく見てみたい。

傲岸不遜な態度ゆえに「輕薄」と評された人物が、唐代には數多く確認できる。その一人に、中唐の韓愈がいる。唐・韋絢『劉賓客嘉話錄』に、以下のような逸話が見られる。

韓十八愈直是太輕薄。謂李二十六程曰、某與丞相崔大羣同年往還、直是聰明過人。李曰、何處是過人者。韓曰、共愈往還二十餘年、不曾共說著文章。此豈不是敏慧過人也。(韓十八愈直た是れ太はだ輕薄なり。李二十六程に謂ひて曰く、某と丞相崔大羣とは同年にして往還するも、直だ是れ聰明人に過ぐと。李曰く、何の處か是れ人に過ぐる者ならんと。韓曰く、愈と共に往還すること二十餘年、曾て共に文章を說著せず。此れ豈に是れ敏慧人に過ぎざらんやと。)

崔大羣とは、貞元八年、韓愈と同年の進士科及第である崔羣のこと、元和十二年から十四年まで宰相の任にあった。おそらくこの文章は、韓愈が淮西の亂を鎮壓した功を以て刑部侍郎となり、あわせて詳定禮樂副使を務めた元和十二年末から十三年末の間の出來事として記述されたのであろう。當時、李程は禮部侍郎であつた。

この逸話の韓愈は、傲慢である。彼は李程に對し、宰相の崔大羣を「聰明人に過ぐ」と一度は持ち上げ、その根據として「自分の前で文學について話さないから」と語り、自己の優越を強調する。これは、自負心の誇示だけを目的とする行爲ではない。それは宰相となつた友人に對する侮りであり、自分が宰相になつても差し支えない學識の持ち主であるとの宣傳でもある。このような發言が、實際になされたのか否かは、今問題ではない。ここで重要なことは、唐代、傲岸不遜な人間に對して「輕薄」という語を用いて評價を下すことが見られた事實である。ここに描かれる韓愈は、「文章」家としての強烈な自負

ゆえに自己の才能の優位を主張し、社會的な上位者を見下して「輕薄」の名を得ている。

同様の使用例が、『舊唐書』卷二百九十上「文苑」上にも見られる。初唐の人である鄭世翼が、當時、文名の高かつた崔信明を侮辱する逸話である。

鄭世翼、鄭州滎陽人也。世爲著姓。祖敬德、周儀同大將軍。父機、司武中士。世翼弱冠有盛名、武德中、歷萬年丞揚州錄事參軍。數以言辭忤物、稱爲輕薄。時崔信明自謂文章獨步、多所凌轢。世翼遇諸江中、謂之曰、嘗聞楓落吳江冷。信明欣然示百餘篇。世翼覽之未終、曰、所見不如所聞。投之於江、信明不能對、擁楫而去。(鄭世翼、鄭州滎陽の人なり。世著姓たり。祖の敬德は、周の儀同大將軍。父の機は、司武中士。世翼は弱冠にして盛名有りて、武德中、萬年丞・揚州錄事參軍を歴す。數言辭を以て物に忤なふにより、稱して輕薄と爲す。時に崔信明は自ら文章獨歩せりと謂ひ、凌轢する所多し。世翼は諸に江中に遇ひ、之に謂ひて曰く、嘗て楓落ちて吳江冷ややかなりといふを聞く。信明欣然として百餘篇を示す。世翼之を覽て未だ終らざるに、曰く、見る所は聞く所に如かずと。之を江に投じ、信明對ふる能はざるに、楫を擁して去る。)

崔信明は、『舊唐書』卷百九十「文苑」上の記述によれば、その文才が「博聞強記、下筆成章」と評價された人物である。また『新唐書』卷二百一「文藝」上には、彼の人のなりが「信明蹇冗、以門望自負、嘗矜其文、謂過李百藥、議者不許。(信明は蹇冗にして、門望を以て自負し、嘗て其文を矜りて、李百藥に過ぎたりと謂へども、議する者は許さず)」と記されている。門地を誇り、文才を恃む崔信明の作品

中の一句「楓落吳江冷」（現在のその詩は傳わっておらず、この句のみが兩『唐書』に残る）が、當時の人々の評判を取っていたのであろう。鄭世翼は、その句を話題にして彼の他の作品を持ち出させ、相手を喜ばせた上で、目を通すこと半ばにして「見る所は聞く所に如かず」と酷評し、その詩集を江中に投じてしまふ。「文章獨歩」を自負する名門出身の崔信明を上回る、鄭世翼の「言辭を以て物に忤」う様子が、描寫されている。ここでも、詩文の才を誇り、不遜な言動で自己の優越を示して相手を貶める人物に對して「輕薄」の評が、與えられている。

このような「輕薄」の使用例が、唐代にはいると多く確認されるようになる。詩文の才の優越をもって他者を見下すという「輕薄」さが多く記録されているという事實は、詩文創作の能力の高低が、唐という社會の中で重い價値を持ち始めたことと深い關係を持つ。後漢から三國期にかけての動亂の中で、命を軽々と投げ出す「輕薄少年」が世の注目を浴び、貴族制が花開いた六朝期には、門地と財力に任せて歡樂に耽る「輕薄公子」が登場した。そして唐代には、科擧制度の整備が進み、文學の能力を足がかりにして政治の樞要に參畫しようとする新興知識人が増加した。舊來の社會を支えた價値基準とは相容れない彼らの言動の中に、君子に非ざる者の新たな姿が浮上してきたのである。

### 二の三 獵官の徒としての「輕薄」

唐代には、前節で確認した詩文の才を恃んで不遜な言動をとる「輕薄」とは、また異なった「輕薄」の用法も見られる。

中唐の柳宗元は、「與楊誨之第二書」〔河東先生集〕卷三十三の

中で、若かった頃の自分を振り返って次のように記している。

及爲藍田尉、留府庭、旦暮走謁於大官堂下、與卒伍無別。居曹則俗吏滿前。更說買賣、商算贏縮。又二年爲此、度不能去、益學老子、和其光、同其塵。雖自以爲得、然已得號爲輕薄人矣。及爲御史郎官、自以登朝廷、利害益大、愈恐懼、思欲不失色於人。（藍田の尉と爲りて 府庭に留まるに及んで、旦暮大官の堂下に走謁して、卒伍と別無し。曹に居れば則ち俗吏前に滿つ。更買賣を説き、贏縮を商算す。又二年此を爲す。去ること能はざるを度りて、益老子を學び、其の光を和げ、其の塵に同ず。自ら以て得たりと爲すと雖も、然れども已に號して輕薄人と爲るを得たり。御史郎官と爲るに及んで、自ら朝廷に登り、利害益大なるを以て、愈恐懼し、色を人に失はざることを思欲す。）

柳宗元が博學宏辭科に合格して校書郎・藍田尉となつたのは貞元十四（七九八）年のことであり、監察御史となつたのは貞元十九（八〇三）年のことである。この時期の柳宗元を韓愈は「柳子厚慕誌銘」〔韓昌黎集〕卷三十二の中で、「僞傑廉悍、議論證據今古、出入經史百子。踔厲風發、率常屈其座人、名聲大振。一時皆慕與之交、諸公要人、爭欲令我門下、交口薦譽之。」（僞傑廉悍、議論今古を證據とし、經史百子に出入す。踔厲風發、率常に其の座人を屈し、名聲大いに振ふ。一時皆之と交はらんことを慕ひ、諸公要人、争ひて我が門下に出でしめんと欲し、口を交へて之を薦譽す）と表現している。「諸公要人」たちが口々に褒めそやし、競って推薦する柳宗元の姿は、韓愈の目に文字通り名聲大いに振るう存在として映つたのである。しかし柳宗元本人は、この榮達を單純に喜んではいない。老子の説く「和光同塵」を行動原理に据えても、目先の功利に右往左往する俗吏



に圍まれて心安らぐことはなかったと述懐している。そして、彼が俗物に同化したときに得た評判が「輕薄人」であった。この「輕薄」という評價を、韓愈のいう明晰な頭腦と鋭い舌鋒で周りの人々を論破して行く柳宗元の姿と結びつけることはできない。なぜならば、墓誌銘という作品の性格上、この表現が、柳宗元に對する批判であるとはいえないからである。實際に韓愈は、周りの人々を壓倒する柳宗元に對する當時の人々の評價を、「一時皆之と交はらんことを慕ひ、諸公要人、争ひて我が門下に出でしめんと欲し、口を交へて之を薦譽す」と記している。

これに對して、「諸公要人」との密接な交際という面から、この時期の柳宗元を嚴しい筆致で描寫する表現が、『舊唐書』(卷一百三十五)「王叔文傳」に見られる。ここでは、「輕薄」の語こそ用いられていない。しかし、王叔文・韋執誼を中心とする政治集團に屬した柳宗元たちの姿が、以下のように記されている。

(王叔文) 每對太子言、則曰、某可爲相、某可爲將、幸異日用之。密結當代知名之士而欲僥倖速進者、與韋執誼・陸質・呂溫・李景儉・韓曄・韓泰・陳諫・柳宗元・劉禹錫等十數人、定爲死交。(王叔文) 太子に對して言ふ毎に、則ち曰く、某は相と爲すべし、某は將と爲すべし、幸いに異日之を用ひんことをと。密かに當代知名の士にして僥倖速進を欲する者と結び、韋執誼・陸質・呂溫・李景儉・韓曄・韓泰・陳諫・柳宗元・劉禹錫等十數人と、定めて死交を爲す。

順宗(李誦)を擁して一氣に急進的な政治改革を進めようと企てた王叔文たちに對する新舊『唐書』の評價は、概して嚴しい。ここでは、太子であった頃の李誦に獻言して皇帝即位後のブレイク集團を形成し

ようとする王叔文の様子が記されている。韋執誼を始めとする陸質・呂溫・李景儉・韓曄・韓泰・陳諫・柳宗元・劉禹錫等の人々を、同書は「僥倖速進を欲する者」と記す。これは、權力に取り入って分不相應な榮達を望む者たち、ほどの意味である。王叔文と彼が集めた人々は、全員が醜い獵官の徒であると評價されている。

さて、韓愈が墓誌銘に記した「多くの高官が口々に推薦する」柳宗元の姿を、非難を前提にした視點から見れば、『舊唐書』の記す醜惡な獵官の徒となる。その姿を具體的に説明する表現が、「僥倖速進を欲する者」なのである。柳宗元が校書郎・藍田尉から監察御史へと官位を進めるうちに得た「輕薄人」の名は、時の權力者によって特別の引き立てを得て榮達の階段を駆け上る姿に對する批判であったといえよう。そしてまた、この批判の矛先の向け方は、本章第一節で確認した武后に拔擢された新興官僚たちや宰相李泌に拔擢されたと記される顧況、さらには宰相關播に認められた李元平たちに對するそれと、軌を一にするものである。

唐代における評語「輕薄」には、權力者に取り入って立身出世に汲々として見なされた人物に押される烙印としての役割もあった。

## 二の四 虚飾に満ちた「輕薄」

さてここまで確認してきた倣岸不遜さや醜い獵官の徒とは異なる「輕薄」の使用法が、『資治通鑑』に見られる。同書卷一百九十八「唐紀十四・太宗貞觀二十一年」には、太宗に寵愛された張昌宗の弟である張昌齡に關する以下のような記事が載せられている。

初、昌齡與進士王公治皆善屬文、名振京師、考功員外郎王師旦知貢舉黜之。舉朝莫曉其故。及奏策、上怪無二人名、詰之。師旦

對曰、二人雖有辭華、然其體輕薄、終不成令器。若置之高第、恐後進效之、傷陛下雅道。上善其言。(初め、昌齡と進士王公治と皆善く文を屬り、名は京師に振ふも、考功員外郎王師旦貢舉に知りて之を黜く。朝を擧げて其の故を曉る莫し。第を奏するに及び、上二人の名無きを怪しみ、之を詰ふ。師旦對へて曰く、二人辭華有りとも雖も、然れども其の體輕薄、終には令器と成らず。若し之を高第に置かば、恐らくは後進の之を效ひ、陛下の雅道を傷らんと。上其の言を善す。)

下馬評が高かつた張昌齡と王公治が進士科を受けたとき、知貢舉の王師旦は兩名を不合格にした。これを不審に思った太宗がその理由を問うと、王師旦は「二人は、言葉に華やかさがある。しかしその詩文の體は『輕薄』である。結局、優れた人材にはならない。このような者たちを良い成績で合格させては、後に續く者たちが兩者をまね、陛下の正しく筋道の通った政道を傷つけるであろう。」と答えた。これを聞いた太宗も、善言として受け入れている。

ここで「雖有辭華、然其體輕薄」といわれている「辭」とは張昌齡と王公治の詩文における言語表現を指し、「體」とは、作者の思想や感情の形象化である詩文の形態(形式・格・傾向など)、そしてそれを通じて表象される作品の本質を指す。人目を引き、評判を取る華やかな詩文を作ることはできても、内容の充實がともなわない空疎な作品であると、王師旦は評價したのである。

同じ場面の記録が『新唐書』卷二百一「文藝 上」にもあり、そこでは太宗に答える王師旦の評が、以下のように載せられている。

太宗問其故、答曰、昌齡等華而少實、其文浮靡。非令器也。取之則後生勸慕、亂陛下風雅。帝然之。(太宗其の故を問ふに、答

へて曰く、昌齡等は華にして實少なく、其の文は浮靡。令器に非ざるなり。之を取れば則ち後生勸慕し、陛下の風雅を亂さんと。帝之を然りとす。)

内容的には、『資治通鑑』の描寫と大差ない。しかしここではまず、王昌齡たちの人物評として「華にして實少なし」という表現が提示され、兩名の人目を引く言動と釣り合いのとれない内實の乏しさが指摘されている。その上で、詩文の浮ついた派手さを「浮靡」と評し、さらに「令器に非ざるなり」と述べて、この二人が優れた人材とはいえないという最終判断を下している。

また、『封氏聞見記』卷三「貢舉」にも、この場面の記述が見られる。こちらでは、登場人物の一人である王公治を王瑾に作るが、王師旦の評語が、「此輩誠有詞華、然其體輕薄、文章浮艷、必不成令器。(此の輩は誠に詞華有れども、然れども其の體輕薄、文章浮艷、必ず令器と成らず)」と録されている。ここでも話の筋は大きく變わらない。ただし、兩名の詩文に對する分析はより詳細になっている。「詞」の華やかさと「體」の輕薄さによってできあがった「文章」の浮ついたなまめかしさを指摘した上で、そのような作品を作り出す兩名が、優れた人材になり得ないと評價している。

さて、張昌齡と王公治(もしくは王瑾)が受験した進士科は、人材選抜のために詩賦や策論の制作を課し、できあがった作品を通じて受験者の人品と教養の高低を測る。つまり、作品への評價はとりもなおさず、作者自身の人格に對する評價となる。ここで王師旦が兩者の詩文に下した「雖有辭華、然其體輕薄」の評價は、同時に人物そのものに對する不合格の宣告でもあった。「華而少實」とは、この評價が下された者の人物像を端的に示す表現なのである。

そもそも文藝の才や豊かな學識を、誠實な人柄や堅實な言動と一致させることは、古來、中國の教養人にとっては、重要な行動指針である。有名な『論語』「雍也」に載る「文質彬彬、然後君子。」という言葉は、君子のあるべき姿を示している。この君子としてのあり方を捨て、榮達を求めていたずらに「文」の華やかさを賣り物にする内實の乏しい小人と見なされた者が、「輕薄」の名をもって斷罪されるのである。

### 三 唐代型「輕薄」の定着

前章までで確認した唐代「輕薄」の用法は、早くも北宋には定着していた。その様子を『資治通鑑』の用例をもとにして確認したい。

同書には、「輕薄」の語が二十例確認できる。このうち、舊來の「輕薄少年」「輕薄公子」につながる、法や規範を無視もしくは逸脱する者、という意味で使用されるのは、わずかに一例、同書卷十七「漢紀九・漢武帝建元六年」に載せる淮南王劉安の上書からの引用「且越人愚慙輕薄、負約反覆、其不用天子之法度、非一日之積。(且つ越人は愚慙輕薄にして、負約反覆、其の天子の法度を用ゐざること、一日の積に非ず)」という部分だけである。そしてこの部分が引用である以上、「輕薄」の用法が漢代のそれであることは當然である。

この「漢代型」の、一種明快な反権力性をしめす「輕薄」に對して、同じ淮南王劉安に関する記述が『資治通鑑』卷十九「漢紀十一・武帝元朔五年」にあり、ここでは「輕薄」の語が以下のように、いわば「唐代型」の陰濕さをともなう人物像を表す語として使用されている。

初淮南王安、好讀書屬文、喜立名譽、招致賓客方術之士數千人。其群臣賓客、多江淮間輕薄士。常以厲王遷死感激安。(初め淮南

王安、好んで書を讀みて文を屬り、名譽を立つることを喜び、賓客方術の士を招致すること數千人。其の群臣賓客、江淮間の輕薄士多し。常に厲王の遷され死するを以て安を感激せしむ。)

ここに登場する厲王とは、劉安の父、前淮南王劉長のことで、文帝の六(前一七四)年に謀反の罪のために王位を剥奪され、蜀郡の嚴道へ移される途中で自殺している。文中の「遷され死す」という表現は、これを指す。親子二代、連續して漢朝から謀反の嫌疑をかけられ、自殺を遂げている。ここでは、「劉安のもとに集う數千人の賓客・方術の士」の多くが「江淮間の輕薄士」である、とまづ明記されている。その上で彼らが、「自殺に追い込まれた劉長の話をして劉安を發憤させ、叛意をおおった。」と描寫し、君子に非ざる者としての言動を具體的に描寫している。

一方、同じ事件の顛末を描く『史記』卷一百一十八「淮南衡山列傳」は、淮南王劉安の心理や行動を、以下のように描き出す。

淮南王安爲人好讀書鼓琴、不喜弋獵狗馬馳騁。亦欲以行陰德拊循百姓、流譽天下。時時怨望厲王死、時欲畔逆、未有因也。…中略…王心以爲上無太子、天下有變、諸侯並爭。愈益治器械攻戰具、積金錢賂遺郡國諸侯游士奇材。諸辨士爲方略者、妄作妖言、詔諛王、王喜、多賜金錢而謀反滋甚。(淮南王安の爲人は好んで書を讀みて琴を鼓し、弋獵狗馬馳騁を喜ばず。亦陰德を行ふを以て百姓を拊循せんと欲し、譽を天下に流く。時時厲王の死を怨望し、時に畔逆せんと欲すれども、未だ因るところ有らざるなり。…中略…王の心以へらく上は太子無く、天下變有らば、諸侯並びに争ふと。愈益器械攻戰の具を治め、金錢を積みて郡國の諸侯游士奇材に賂遺す。諸の辨士の方略を爲す者、妄りに妖言を作し、王

に諂諛するに、王喜び、多く金銭を賜ひて謀反まうはん滋ま甚しし。

『史記』における淮南王の描寫は、詳細である。彼の叛意が早くから形成されていた事實、反亂の準備を着々と進めていく様子などが丁寧ていねいに記される。また彼の人柄を、讀書鼓琴を好み、狩りや遠乗りを喜ばない文化人と位置づけ、陰徳を積むことによって民衆の支持を得て名聲を天下に廣めた人物である、とも述べている。その劉安が金銭を積むことよって集めた「游士奇材」とは「妄りに妖言を作し、王に諂諛する」者たちであった。これこそ前章で確認した唐代型「輕薄」の評語にふさわしい人物像である。しかし司馬遷は、淮南王に阿諛追從する「游士奇材」の姿を丁寧ていねいに描きながらも、それらの言動や人物像を「輕薄」の語を用いて表現していない。

一方、先に見たように『資治通鑑』では、まず「群臣賓客」の基本的な特徴を「輕薄士」と規定した上で、彼らが淮南王をそのかして謀反の嫌疑をかけられる素地を作って行く様子が、描かれていく。『資治通鑑』においては、「輕薄」という語が同定する人物像が、言葉巧みな阿諛追從者、として認知されている。つまり、陰濕なイメージをとまなう「唐代型」の意味で用いられているのである。

またこれとは別に、北宋の李昉撰『太平廣記』の部立てからも、唐代型「輕薄」が廣く認知されていた様子が窺われる。同書では、卷二百六十五と卷二百六十八とに「輕薄」の項が立てられ、杜審言・杜甫・李賀・溫庭筠などに關する三十四篇の逸話が集められている。同書に載せられている「輕薄」な人物像は、その多くが、本稿で確認してきた唐代型の「輕薄」な文人としてのそれである。以下に挙げる『太平廣記』卷二百六十五「輕薄」李賀の記事などはその代表例である。ここでは、面會を求めて訪ねてきた明經科出身の元積を冷たく追い返

す李賀の姿と、その後日談とが描かれている。

(李) 賀覽刺不容遽入。僕者謂曰、明經及第、何事來看李賀。  
(元) 積無復致情、慙憤而退。其後自左拾遺。制策登科、日當要路。及爲禮部郎中、因議賀祖諱、不合應舉。賀亦以輕薄、爲時輩所排、遂爲轆軻。(李) 賀は刺を覽て容れずして遽に入る。僕者謂ひて曰く、明經の及第、何事ぞ來りて李賀を看ると。(元) 積復た情を致すこと無く、慙憤して退く。其の後左拾遺たり。制策に登科して、日に要路に當たる。禮部郎中と爲るに及び、賀の祖禰の諱なづななるに因りて、合あはに進士の舉に應ずべからざると議す。賀亦輕薄を以て、時輩の排する所と爲り、遂に轆軻を致す。

この記事はもともと、晩唐・康駘の『劇談錄』卷下「元相國謁李賀」から採られた。引用文波傍線部分の「其後自左拾遺」を『劇談錄』は「其後左拾遺」に作り、また「因賀祖諱」を「因賀祖禰諱」に作る。元積が左拾遺に任官したのは、元和元年、才識兼茂明於體用科に登第後のことである。また、李賀の進士科受験に關して取りざたされたのは父の諱である晉肅であった。この點について『太平廣記』の記述はともに誤っており、この部分、文意が通じない。當該部分の訓讀は、『劇談錄』に従って改め、傍線を附した。

さて、ここに登場する李賀は、己の才能を過信し、面會に來た明經科出身の元積を愚弄し、追い返すという鼻持ちならない人間である。さらに、その傲慢さの報いを受け、「後に高官となった元積によって進士科受験資格を奪われ、その『輕薄』な人柄のために同時代の人々から退けられて、失意のうちに終わった」と記されている。これは、前章で確認した、自己の文才を鼻にかけて他者を見下す、という典型的な小人像である。

このような『太平廣記』所引の康駢『劇談錄』の描寫が、李賀の實像とかけ離れていることは、すでに大方の指摘するところである。しかし、そのような誇張や歪曲を含んだ記述であるからこそ逆に、惡意をもって李賀を「輕薄」な人物として描き出そうとした創作意圖が浮かび上がる。

またこの逸話では、單にある人物の「輕薄」さを描き出して非難するにとどまらず、「輕薄」な人物がその言動ゆえに身を滅ぼすという勸善懲惡的な話の筋が確立している。ここから、すでに晚唐には、「輕薄」な才子の典型が認知されており、「輕薄」さ自體の描寫ではなく、その人物を巡る事件の顛末に關心が向いていたことが窺われる。

さて、宋代の人々が使う「輕薄」という評語は、前時代の士大夫たちを批判するためだけに用いられたのではない。むしろ同時代の科擧受験者を非難するために多用されていた。例えば、歐陽修は『歸田錄』卷一に、北宋、太宗の時の出來事として以下のような逸話を載せている。

太宗時親試進士、每以先進卷子者、賜第一人及第。孫何與李庶幾、同在科場。皆有時名、庶幾文思敏速、何尤苦思遲。會言事者上言、擧子輕薄、爲文不求義理、惟以敏速相誇。因言、庶幾與擧子於餅肆中作賦、以一餅熟成一韻爲勝。太宗聞之大怒。是歲殿試、庶幾最先進卷子、遽叱出之、由是何爲第一。（太宗の時、親しく進士を試み、毎に先に卷子を進めし者を以て、第一人及第を賜る。孫何と李庶幾と、同じく科場に在る。皆に時名有りて、庶幾は文思敏速、何は尤も思遲に苦しむ。會事を言ふ者上言すらく、擧子の輕薄たる、文を爲るに義理を求めずして、惟だ敏速を以て相誇る。因りて言ふ、庶幾は擧子と餅肆中に於いて賦を作るに、一餅

の熟せるを以て一韻を成さば勝と爲すと。太宗之を聞きて大いに怒る。是の歳の殿試、庶幾最も先に卷子を進むるに、遽に叱して之を出す、是によりて何第一と爲る。）

ここで擧子の一人である李庶幾は、詩作における「敏速」さをもって、才の高さを見せつける。作品の完成度ではなく、詩作の速さが價値を持つのは、ひとえに殿試の試験官である太宗が、最初に答案を提出した者を最優秀合格者として選ぶためである。このことが廣く知られている時に、下馬評の高い擧子のうち李庶幾が「敏速」をもって誇るのは、當然のことである。一方、この風潮を苦々しく思っていた人物が「擧子中の輕薄な者たちは、詩文の内容やことわりを重視せず、ただ速成をもって自慢しあっております。だから『庶幾たち擧子が餅屋で賦を作るとき、餅一つが煮上がるまでに一韻できた者が勝ち（だと言って速成を競っている）。』などという話が聞こえてくるようになるのです。」と、言上するのもまた自然の成り行きであろう。

さて、この逸話において特に注目すべきことは、周りの者たちに對する李庶幾の傲岸不遜さが、調子に乗って練り廣げる「餅屋での自慢話」という卑俗な場における言動を通して描かれている點である。この李庶幾の姿は、確かに唐代型「輕薄」の類型に當てはまる。しかし、唐代文人の「輕薄」な言動は、朝廷内、高官同士もしくは知識人同士のやりとり、などといった閉鎖された社會を舞臺として記録されていた。このことは本稿が第二章で取り上げた控鶴府における則天武后と取り卷きたちの馬鹿騒ぎ、刑部侍郎韓愈が禮部侍郎李程に示す不遜な自負、そして李賀と元稹の確執などからも確かめられる。

ところが、科擧制度が名實ともに主たる人材登用法として一般に認められた宋代以降、士大夫たちの「輕薄」な言動は、廣く社會全般で

見受けられるようになる。それはひとえに、科擧官僚が政治の中樞に座るとともに、科擧受験者が飛躍的に増加したことに起因する。唐代型の「輕薄」な才人は、このような社會構造の變化の中で、市井の人々にとってもありふれた存在となっていくのである。

このようにして見てくると、唐代から新たに現れる「輕薄」な人物像は、科擧制度により臺頭した新興知識人の増加に連動し、定着していったといえる。

### まとめ

唐代において「輕薄」の語を用いて評價される人間には、以下に擧げる三つの類型が確認できた。

まず一つめは、「矜己傲物（己を矜りて物に傲る）」と表現される行動である。これは、自己の詩文の才能を鼻にかけた傲岸不遜さを表す。強烈な自負を以て見下すのは、なにも無學な者ばかりではない。むしろ同じく詩文の才をもって身を立てる士大夫同士の間でこそ、この差別化は熾烈を極める。それゆえに、そのけなしあいを見つめる第三者の目には、愚かしく、品性下劣な行爲として映る。

二つめは、「欲僥倖速進（僥倖速進を欲す）」という言葉で表現される強烈な榮達願望およびその實現を目指す行動である。唐代に限らず、上昇志向の強い人間は、いつの世にも存在する。しかし、貴族制の全盛期と科擧による登用が制度として一般化し始め、發展して行く時代とは、そのあり方は自ずと異なってくる。まして「溫卷」などの事前活動が公認され、受験者の下馬評が上間に達することも多かった時に、自己の存在を他者に知らしめようとする活動が加熱することは、むしろ自然である。新興知識人たちは、彼らを推挽してくれる高官や

貴人を求めた。しかし一方、自己宣傳に努めるその姿は「醜惡な獵官の徒」という汚名を浴びせられる格好の標的となった。舊來勢力である貴族階層の人々の價值觀をもって、臺頭しつつある新興知識人たちを評價するとき、その姿は權力者に取り入って立身出世に汲々とする阿諛追從者として糾弾されることとなる。

そして三つ目が、「華而少實（華にして實少なし）」である。上述した二つの類型がともに「輕薄」な人物の行動を表現しているのに對し、この「華而少實」という表現は、「矜己傲物」「欲僥倖速進」といった行動をとる人間の本性を示している。この場合「輕薄」という評語は、人目を引く派手な言動に對して釣り合いのとれない内實の乏しさや人徳の缺如を指摘し、その人物の下劣さを明示するために用いられる。

以上の三點を指摘され、「輕薄」と評された唐代の人物の多くは、新興知識人であった。この點からいえば、唐代の「輕薄」な人々は、後漢・三國期の「輕薄少年」や南北朝期の「輕薄公子」に對し、「輕薄士人」もしくは「輕薄才子」とでも呼ぶべき存在だった。科擧による人材登用制度が整備され始めた初唐から盛唐にかけて、政治の中樞は、その大部分を上流貴族が占めていた。彼らは貴族制という舊來の社會的枠組みの中で教養を身につけた人々である。その目には、據り所とする門地も、貴族的教養もなく、ひたすら己の詩文の才を磨いて中央政界に進出しようとする新興知識人たちが、舊來の社會規範を崩壊させる獵官の徒として映る。本稿で確認してきた唐代の人物評語「輕薄」に込められた侮蔑と人格否定の強烈さは、この舊來勢力と臺頭する新興勢力との價值觀のぶつかり合いによって生じたといえる。

當然、貴族階層が政治權力の座から姿を消した宋代以降に使われる人物評語「輕薄」と、唐代のそれとは、その語を用いる者の立場が

異なる。唐代には舊勢力の價值觀を守る人々が新興知識人に向けて、宋代以降には整備された科擧制度の中に同じく生きるもの同士が、相手の品性・人格の下劣さを非難するために「輕薄」という人物評語を用いたのである。

注

- (1) 加賀博士退官記念『中國文史哲論集』(一九七九 講談社) 所載 小川陽一「『輕薄』考——明代白話短編小説と善書——」 八三八頁。
- (2) 張華「輕薄篇」に込められる貴族子弟への批判については、すでに大方の指摘するところである。例えば増田清秀氏は、『樂府の歴史的研究』(一九七五 創文社) 一六三頁において「輕薄篇」を「名士たちが豊かな資財に任せて、放逸な行動に耽りながら、日々を過す有様を刻明に寫し出し」た作品と位置づけた上で、「批判的態度を取るだけでなく、彼の懷抱せる反骨性さえも押し出している。」と説明している。
- (3) 『舊唐書』卷一百九十「文苑 員半千」  
員半千、本名餘慶、晉州臨汾人。少與齊州人何彥先同師事學士王義方。義方嘉重之。嘗謂之曰、五百年一賢、足下當之矣。因改名半千。
- (4) 『舊唐書』卷一百九十「文苑 崔信明」  
崔信明、青州益都人也。後魏七兵尚書光伯曾孫也。…中略…及長、博聞強記、下筆成章。鄉人高孝基有知之譽、每謂人曰、崔信明才學富贍、雖名冠一時、但恨其位不達耳。
- (5) 『劇談錄』卷下「元相國諷李賀」  
(李) 賀覽刺不容遽令僕者謂曰、明經擧第、何事來看李賀。(元) 相國無復致情、慙憤而退。其後左拾遺。制策登科、日當要路。及禮部郎中、因議賀祖禰諱晉、不合應進士擧。亦以輕薄、爲時輩所排、遂成輓軻。

(6) 例えば、『李賀詩傳』(一九八四 山西人民出版社) 二一五頁において、劉衍氏は以下のように『劇談錄』の記述の矛盾を指摘する。「如、元稹、生于唐代宗大曆十四年(公元七七九年)、貞元九年(公元七九三年)明經擧第。其時李賀還不滿四歲。就是貞元十八年冬、元稹和白居易同中拔萃甲科時、李賀也只十三歲。可見、所謂拒見元稹、絕不可信。」